

キビの栽培

1. 品種特性

「松本系」

もち種。中生、草丈は中位。松本、安曇地方で栽培されている在来種。穂は寄穂形で長く、穂数が多い。

2. 土づくり

深さ 12～15 cm の畦溝を切り堆肥施用、野菜の後作では無肥料で栽培する。

キビを交えた輪作の例としては、キビ→ムギ（アカクローバ草生）→ダイズ→ジャガイモ→秋野菜（3年5毛作）。

3. 播種

播種時期：長野県5月中・下旬～6月中旬 遅まきは出穂までの期間が短く、生育量が小さいため収量が少ない。早まきはアワノメイガの被害をうけやすい。

播種量： 条播き：小袋（40ml：5000粒）で4～7.5坪（畦幅60cmの条播きで、1m間に120～240粒）

点播き：9～13坪（畦幅60cm、株間10～15cm、1穴10粒播き）

播種様式：①条播き：畦幅60～70cm、鋤幅10～15cmの播き溝を切り、厚播きにならないように条播きする。

②点播き：株間15～20cm、一カ所に10粒内外に播く。

覆土： 1.5～2cm（覆土が3cm以上になると発芽が遅れるので、覆土は厚くならないように丁寧に行い、軽く鎮圧する）。

4. 管理作業

間引き： 間引きは除草を兼ねて2～3回行う。発芽後10日頃に密生する部分を間引く。その後7日ごとに行い、最終的に30cm間に10～15株の苗立本数を目標にする。点播きでは1～2本立ちに間引く。薄播きの場合は間引きの必要がない。

除草： 間引き後に畝間を除草する。

土寄せ： 草丈20～30cm頃に倒伏防止のため土寄せを行う（キビは草丈が高くなるため、土寄せを念入りに）。

鳥害防除：キビは鳥害が多く収穫皆無になる場合があるので、スズメの多い地帯は出穂後、防鳥網等で鳥害対策を行う。

5. 収穫・調整

収穫時期： 5月下旬播種で9月中旬～下旬収穫。穂の50%くらいが黄化成熟し、茎葉が黄変したところが適期。キビは成熟すると脱粒しやすいので、刈り取り時期が遅れないようにする。

収穫： 穂首から40 cmの長さに穂刈りし、束ねて軒下に吊して十分乾燥させる。

脱穀調整： 穂をシートの上に広げ、棒でたたき脱穀する。フルイで殻やゴミを除き、箕で風選して調整する。

精白： 少量の場合は、ミルサーで粉にならない程度に軽く挽き、殻を除いて精白する。

6. 利用のしかた

キビ飯(米にキビを5～10%入れて炊くと粘りがでる)、キビ粥、キビ餅、キビかりんとう。

(公財) 自然農法国際研究開発センター
研究部 育種課